

No. 1053

東京情緒

—ボロ家とゴミと廃船と—

花の都東京の片隅、ゴミと廃船にかこまれてボロ家がある。トタンとベニヤと廃品を、どう組みあわせたか倒れかかるように二階家が建つ。室の数、推定五十、住人、推定十名で詳細は判明せず。モノレールと高速道路の騒音を頭上にいただき、窓ごしに東京都のゴミ積み替え場を見れば、足下には廃船にうまる船溜り、悪臭があたりをうめつくす。どこから流れついたか、ここに働く人もあれば、住む人もある。住人は「住めば都」と高笑い。文明と文化の行きつくところ、この環境、この絶景。大日本帝国、首都東京の情緒あふれる風景である。

—公共性か環境権か—

高速道路

モーターレーゼーションの発達は、高速時代を生みだし、荷を満載した、大型車両や乗用車が高速道路を突走る。しかし一方では、騒音、振動排気ガスで苦しむ人々をも生み出した。神奈川川崎市向ヶ丘。東名高速道路の東京料金所附近に隣接して建つ市営南平第2団地と宮前平グリーンハイツの住民は、一日中、騒音地獄に悩まされる生活だ。窓の下を車が走る。1日平均75ホーン24時間続く騒音に、耐えきれない人々は、次々に引越した。空屋がめだつようになった。ある主婦は「もうほとんど疲れました。排気ガスで眼はやられるし、夜はねむれないし子供は、情緒不安定になり、イライラしどろしどろ。風邪をひいたらなかなか直らない。勉強はできないというし、ほんとにどこかへ逃げだしたい」首都高速道路が貫通して以来、急激に利用する車は増え、今、1日平均10万台を越える。なんとかして欲しいと住民側は公団に訴えた。恒久的対策として、東名をドームですっぽり覆うかトンネルにして欲しいと要求した。更に安眠ゾーンの設置や大型車両の深夜早朝の走行禁止なども早急を実施して欲しいとも要求した。しかし、公団側は具体的対策は何も示さず、騒音の実態調査測定すらやっていない。山梨県大月市下和田。ここの部落の葛野川の上を橋を架けた中央高速道路が走る。昭和43年国土開発幹線自動車道建設法という法に基いて建設された。そして交通量も増え去年の暮れ、2車線から4車線に拡張されて以来、この橋が住民から太陽を奪い、振動をもたらし、生活をおびやかすまでになった。マッサージ業を営む大石一正さんの家はその影響をまともに受けている一軒である。一番寒く、太陽の陽が一番欲しい冬の間、まったく陽があたらない。コンクリートの橋脚の陰から陽はのぼり、道路の陰に沿って動き、別の橋脚の陰に陽は沈むからだ。西室薫さんの家と養鶏場も全く陽はあたらず、年老いた西室さんは、息子夫婦のいる大月へ越した。養鶏もできなくなりやめた。西室さんは「公団は、なぜ工事中に言ってくれなかったというのが、できてみなければわからなかった。素人には予想もできなかった。4車線になってそっくりあたらなくなった。」ある主婦は「洗たくものが全然乾かない。それに衝撃で窓がビリビリいう。橋を今さらどかしてくれともいえないし……」金で戻ってこない太陽の陽。下和田の人々には、高速道路はどんな恩恵も施さなかった。公共の利益とは誰れのためのものなのか。下和田の人たちは、何ものにもかえがたい健康や生命をおびやかす高速道路を仰ぎみて、実にゆうつな毎日をおくっている。